●論文●

東京大学における学生表彰について

大垣 眞一郎
（東京大学学生表彰選考委員会前委員長・工学系研究科教授）

一　学生表彰制度創設の背景

東京大学では、佐々木毅前総長の発案で、二〇〇二（平成一四）年度に「東京大学総長賞」と呼ぶ学生表彰制度を創設した。佐々木前総長の意図は、これまで東京大学は人や業績を讃えるということについて十分に力を尽くしてきていないのではないか、その努力をすべきであり、その形を作るべきであるというものであった。その一つとして学生の諸活動を表彰する制度を導入したわけである。同時に、私財の寄付、ボランティア活動及び援助、寄附講座、寄附研究部門等により、東京大学の活動の発展に大きく貢献した個人、法人または団体に対し、感謝の意を表すため、「東京大学功績者顕彰制度」を設け、「東京大学稷門（しょくもん）賞」を贈呈する制度を導入した。さらに、学術文化の発展に特に顕著な貢献をした方々、あるいは、東京大学の教育研究の発展に特に顕著な功績があった方々を顕彰する「東京大学名誉博士」の称号も創設した。

一部の学部や学科で、学業成績あるいは卒業論文、修士論文に対する表彰制度は存在していたが、ここで紹介する制度の導入までは、東京大学として全学的な学生表彰制度は整備されていなかった。

二　東京大学学生表彰の制度

東京大学学生表彰実施要綱によれば、表彰の基準は、本学の学生として、学業、課外活動、社会活動等において特に顕著な業績を挙げ、他の学生の範となり、本学の名誉を高めた者について行うとしている。

本学の教職員及び学生は、候補者を総長に推薦することができる。選考は、学生表彰選考委員会が担い、委員構成は次の通りであり、総長が委嘱する。

（一）本学の教授及び助教授のうちから若干名（現行は九名）

（二）総務部長及び学生部長

（三）本学教職員以外の者　若干名（現行は報道関係有識者二名）

選考の基準として、次のような五つの内容が申し合わせとして定められている。

（一）①学業において、研鑽に励み、他の学生の範となった個人又は団体。②学業において、学界等により優れた評価を受け、東京大学の名誉を高めた個人又は団体。

（二）課外活動において、国内外の各種スポーツ、競技、演奏、展示、発表等で優秀な成績を収め、東京大学の名誉を高めた個人若しくは団体、又は、課外活動を支援し、課外活動の充実と振興に著しい貢献をした個人若しくは団体。

（三）環境保全、災害救援、社会福祉、青少年育成、海外援助協力等の各種社会活動において、活動実績が認められ、他の学生の範となった個人若しくは団体、又は、社会的に優れた評価を受け、東京大学の名誉を高めた個人若しくは団体。

（四）大学間の国際交流において、相互理解と友好関係を深め、東京大学の国際交流の発展に著しい貢献をした個人又は団体。

（五）その他、これらに準ずるもので、「東京大学総長賞」に相応しい貢献があった個人又は団体。

要するに、自薦、他薦を含め、学内に広く募っていること、学業、課外活動など学生のあらゆる活動を対象として

いること、これら候補者を同じ場で審査し選考していること、を特徴としている。選考委員会は、業績や貢献の内容がまったく異なる個人あるいは団体を、相対的に比較し選考しなければならない。

表彰式は、年二回、秋と春に開催している。表彰式のあと、各受賞者は五分～一〇分程度の受賞講演を、総長、副学長、部局長、選考委員等を含む全学からの聴衆の前で行う。春の表彰式は、三月末の大学院の修了式と卒業式のある二日間に設定し、卒業式などと共に祝祭の雰囲気を相互に高め合うように工夫している。

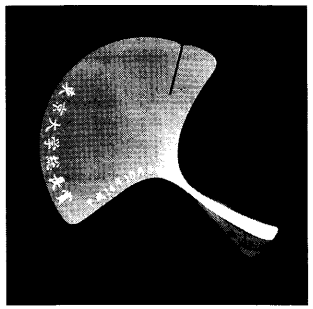
授与式の様子

三　表彰実績

賞の受賞者実績数は表に示す通りである。平成一四年度は一〇件であったが、応募者数の増加に伴い、一五年度、一六年度は一五件の受賞者を出している。

表　総長賞受賞者数

	個人		団体	
	学業	課外	学業	課外
H14	6	2	0	2
H15	7	2	1	5
H16	9	1	0	5



受賞記念品

具体的な受賞者と受賞内容は左に示す通りであり、「東京大学総長賞」の賞としての性格がわかるであろう。三か年の実績を、類型ならびに学部、大学院ごとに示してある。団体は固有名詞を入れてあるが、個人は名前を省略する。人数の記載のないものは一名である。個人受賞者には留学生が二名含まれている。

個人（学業）二二件

法学部（二名）「最優秀成績者」／経済学部（三名）「最優秀成績者」／教養学部（二名）「最優秀成績者」／薬学部「最優秀成績者」／数理科学大学院「最優秀成績者」／医学部（二名）「優れた解剖実習マニュアルの作成」、「生命科学研究における優れた貢献」／医学系大学院「細胞分裂における最後のステップの解明」／農学生命科学大学院（二名）「優れた国際交流活動」、「生物界初のホウ素トランスポーター遺伝子の発見」／理学系大学院（三名）「反陽子を生成する新装置の建設への貢献ならびに生成された反陽子の精密な測定」、「理論天文学に対する貢献」、「重力レンズ現象を用いた宇宙の構造進化の解明」／新領域創成科学大学院「世界初のウミユリの人工孵化に成功」／総合文化大学院「自閉症研究における卓越した業績と医療保健現場への社会貢献」／工学系大学院（三名）「二〇〇二年先端科学技術大賞フジテレビ賞等受賞」、「国際協力事業団・国際協力大学生論文コンテスト特選受賞」、「ベトナム古民家と風環境の研究ならびにその設計活動」

個人（課外活動）五件

経済学部「最年少七大陸最高峰制覇」／総合文化大学院「第一五回三島由紀夫賞受賞」／農学生命科学大学院「山岳スキー未滑走斜面滑降初成功（鹿島槍北壁、北海道ニペソツ山東壁）」／新領域創成科学大学院「オープンヨーロッパ身障者自転車競技大会パイロット走者としてアシスト二位入賞、アテネパラリンピック出場権獲得」／教養学部「東京大学として二十一年ぶり箱根駅伝走破」

団体（学業）一件

Cube Satプロジェクトチーム「超小型人工衛星Cube Satの打ち上げ成功」

団体（課外活動）一二件

運動会応援部／運動会少林寺拳法部／運動会漕艇部／音楽部管弦楽団／音楽部コールアカデミー／東京大学柏葉会合唱団／囲碁部／地文研究会天文部／Robo Tech（ロボテック）／環境三四郎／アジア農村研究会／五月祭常任委員会

これらの実績からわかるように、学部の最優秀成績に基づく表彰者の選出は、いままでのところ、法学部、経済学部、教養学部、薬学部のみとなっている。文学部、工学部、理学部、農学部のように、専門学科が数多くある学部では、専門学科を超えて、学業成績の客観的で公平な比較をすることは難しく、推薦がいままでのところ出てきていない。各学部、研究科内では、その学術分野に即した顕彰の理念、推薦方法など、さまざまな検討が現在進められているところである。

四　表彰制度の効果と課題

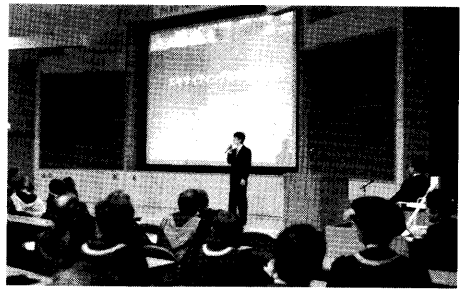
当然ではあるが、「総長賞」を目指すことによって、学生の学業活動が活性化するということはない。学生の日常の学習と研究の結果生まれ出た優れた成果の中から、受賞の対象が選び出されているという形である。学業や研究が賞を目指して活性化するようでは、知の創造と学習の自由な場という大学本来の道をはずすことになる。一方、課外活動では、「総長賞」の授与実績が積み重なるにつれ、部活動、特に運動関連の部やサークル活動では、「総長賞」を目指すことが直接的な良い励みになってきているようである。また、優れた社会的貢献を行った学生を大学として顕彰し、学内に周知することにより、学内構成員を啓発できるという効果もある。

実績に見るように、受賞内容は多彩であり、その選考は難しい。しかし、総合大学が持つ学術の多様性とそこから生まれる教育の多様性を、単純な尺度で整理してはいけないことは明らかである。学生の顕彰といえども、学術と教

育の多様性を無視するような安易な選考は許されないであろう。選考委員会の苦労は続くこととなる。

表彰式のあと引き続いて行われる受賞者の講演は実に楽しい。内容が多彩で優れているばかりでなく、それぞれの発表方法が独創的で個性的であるが故である。一人五分～一〇分程度の短い講演であるが、若い学生諸君のさまざまな学業、課外活動の成果を次々に聴いていると、大学の若い知の広大な拡がりを見上げるような思いがしてくる。夜空に、天の川が拡がり、三日月が現れ、すばるが輝き、人工衛星が飛び、さらには打ち上げ花火が咲くとでも喩えられるか。それぞれが独特の色と光を放っている。でき得るならば、この楽しさを、全学生や全教職員と、さらには学外の方々と共有できる仕組みがほしいところである。今後の課題であろう。

知の創造が、知を創り出した他者への敬意から始まるものであるとするならば、若い学生諸君の活動を讃える催しは、知の創造の場としての大学にとって、本質に関わる重要な行事である。



受賞者による講演の様子